Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

安部公房研究 : 〈限界〉を描く表現構造（二〇二五年度修士論文要旨）

井出, 智保

(Citation)
國文論叢別冊,3:87-88

(Issue Date)
2026-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100505573

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505573

KOBE UNIVERSITY

■二〇二五年度修士論文要旨

安部公房研究
――〈限界〉を描く表現構造――

井出　智保

本修士論文では、「壁――S・カルマ氏の犯罪」（一九五一）、『密会』（一九七七）、『カンガルー・ノート』（一九九一）の三作品を検討する。安部作品における不条理な設定や展開に対し、従来の研究では社会状況や思想的背景など、物語外部の事象との照合を優先してきた。こうした視座は多様な論点を提示したが、テクスト内部の論理に即した分析を閑却する傾向にある。本稿は、主人公が迎える結末に着目し、テクストの内的論理に即して分析することで、安部公房文学の特質を明らかにする試みである。

第一章では、「壁――S・カルマ氏の犯罪」を考察の対象とした。本作の主人公は、ある朝突然名前を失い、それと連動して自己の「胸の中の空洞」に直面することになる。先行研究の多くは、結末で彼が変形する「壁」に対し、疎外や断絶といった象徴的意味を見出してきた。対して本稿では、「壁」をあらゆる象徴的意味が剥奪された形式そのものとして捉え直す。

最終的に主人公は、「世界の果」の「曠野」において成長し続ける「壁」へと変形する。この変形を、「S・カルマ」という名前を喪失し、〈ぼくは○○である〉という自己定義が不可能になった主体が、名前を取り戻したり、新たに獲得したりすることなく、〈ぼくは○○である〉という定義の枠組みそのもの、空洞を囲う「壁」の形へと変じた事態であると指摘する。「見渡す限りの曠野」において「成長し続ける壁なのです」という現在形によって終幕するのは、枠組みそのものの自己言及という、語りの限界点であるとして論じる。

第二章では、『密会』を取り上げた。本作は、失踪した妻を捜して巨大な病院に迷い込んだ主人公が、院内での出来事を三冊のノートに綴るという形式をとる。記述者には、自らを三人称で記述するという客観性が課せられるが、実際には主観的な記述が繰り返され、正確な時間軸や事件の運びが確定できないようになっている。

本章では、ノート三冊の後に置かれた「付記」と、そこで提示される出口のない空間及び「明日という過去」という特異な時空における「一人だけの密会」を分析の焦点とした。従来、この「付記」は「ノート」三冊の記述者、すなわち主人公による記述とみなされてきたが、本稿では、結末で達成される「一人だけの密会」が、主人公自らによって記述された瞬間にその秘匿性を喪失するという矛盾に着目した。ノート形式の必然性や盗聴器というモチーフ、「嘘発見器」という作中の機械の役割を精査することで、「付記」は密閉空間を覗き見る第三者の記述領域として捉え直す。結末において主人公は「明日という過去」の中で「何度も死に続ける」存在として描かれる。この変容については、彼が記述主体から記述される対象へと転じた帰結であると分析する。すなわち、記述されることで未来が固定された過去となり、読解のたびにその「死」が反復・再生される構造を指摘した。以上の分析を通じ、『密会』を自らの記述という枠組みから逸脱した「付記」の中に主

人公を幽閉し、書き手と読み手の接続を院内に蔓延する「盗聴」の構造に重ね合わせたメタフィクション的実験作として論じる。

第三章では、安部公房の実質的な遺作である『カンガルー・ノート』を対象とし、一人称の語りによる「語り直し」の機能と、結末に訪れる語り手の死を考察した。

本作の語り手「ぼく」は、脛に生じたカイワレ大根の治療のために送り込まれた世界で、悪夢的な彷徨を繰り返す。ここでの語りの特徴は、先行する描写が後続の語りによって即座に訂正、あるいは取消されていく運動にある。本稿では、ジャン・ボードリヤールが提唱した「シミュラークル」および「ハイパーリアル」の概念を視座に、この語り直しの連鎖が現実と虚構の境界を無効化し、オリジナルのないコピーが自律的に増殖する世界を生成している点を指摘した。「死」の現実性が失われたこの不安定な時空において、なお主人公は死を迎えるが、その瞬間を語る主観的な記述は、最終的に第三者による「新聞記事」という公共的かつ匿名的な記録へと回収される。この結末を、それまで語り直しによって維持されてきた流動的な世界が、新聞記事という外部の固定された記録によって切断され、発行を通して増幅する構造として論じる。

以上三作品の検討を通じ、安部作品において主人公が結末を迎える必然性をメタフィクションの視点から考察した。「S・カルマ氏の犯罪」において主体は、自己を規定し得ぬまま、その形式を具現化するように「壁」という物質へと変容した。『密会』における記述者は、記述される側へと転じることで、結末の確定した物語の中で死を反復し、その密会を覗き見られる存在となる。そして『カンガルー・ノート』において、語り手は外部の記録へと回収されることで語りの特権性を喪失し、匿名的な記号へと収束していく。これらの結末は、現実には起こり得ない不可解なものとして映るが、安部公房が一貫して、虚構的実在としての作中人物をいかに虚構内部の論理において必然的な死に至らしめるかを探求した軌跡であると捉えられる。

安部作品の結末は、決して荒唐無稽であるという評価に終始するものではなく、虚構が虚構として徹底された到達点なのである。読者は思想史的知識や伝記的情報を欠いていても、語りや内部で反復されるモチーフから、言語によって構築された緻密な空間の手触りを感じ取ることが可能となる。そして、虚構でありながら、強固な内部構造によって確立された空間に触れたとき、読者はある種の不穏さ、あるいは戦慄に近い感覚を抱く。本稿は、こうした感覚がいかにして物語構造の必然として生み出されているのかを、結末部の再検討を通して明らかにする試みである。

（いで　ちほ）